

●コレクション・データ

時代 弥生時代後期  
 調査 唐古・鍵遺跡第51次調査  
 発見年 1993年  
 大きさ 高さ 73.4cm  
           口径 39.6cm  
 展示位置 第1室・「交流と戦い」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 39

吉備から運ばれた大形器台

唐古・鍵遺跡からは、さまざまな地域から運ばれてきた文物が出土します。今回は、吉備(現在の岡山県中・西部)地域から運ばれてきた大形器台を紹介しましょう。

器台は、壺を載せる円筒状の台として発達したもので、弥生時代中期から古墳時代にかけて、西日本で多く作られました。

今回の器台は、高さ約73cmもある数少ない大形品で、円筒部中央がややしまった形態です。円筒部には5段階構成の多条の凹線文が廻らされ、その間には長方形の透かしがあげられています。また、大きく外反した口縁部には3重の竹管文と斜線で構成された連続渦文が廻らされています。

このような特徴をもつ器台は、吉備を中心とする地域にみられ、また、土器の胎土(粘土)もこの地域の特徴を示す灰白色を呈しています。

このように形態や文様、胎土から土器の産地を推定すること

が可能になります。土器が運ばれる原因には、「移住に伴って運ばれた場合」や「特別な祭事に送られた場合」、「土器そのものが商品として流通した場合」、「内容物が運ばれた結果としての土器」などさまざまなことが想定されます。今回の土器は、重さが9.5kgもある大形品で、壺などを載せる特別な器台であることや、ト骨や盾とともに井戸から出土したことからマツリ

の場に供されたことが想定でき、「特別な祭事に送られた」可能性が考えられるでしょう。

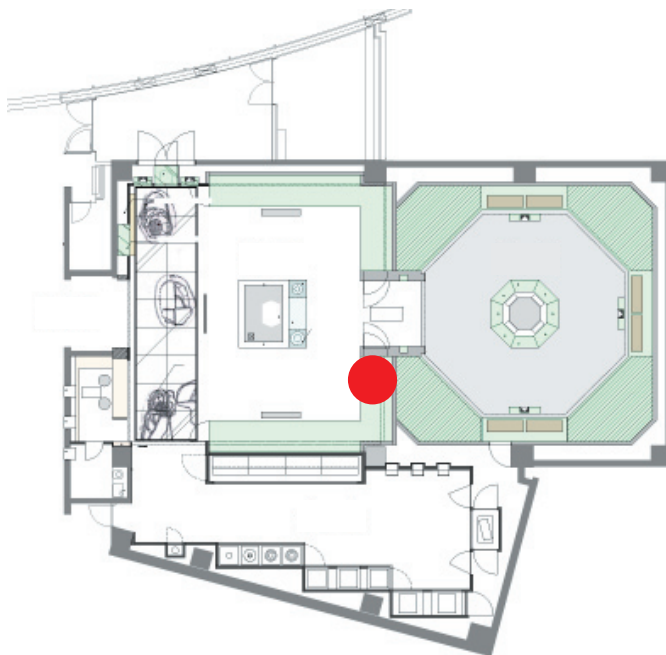
ところで吉備地域では、弥生時代の終わりごろ、首長の墓にお供える大形の特殊器台が出現し、埴輪の原型になったとされています。唐古・鍵遺跡の大形器台は、これより200年ほど前の後期初頭のもので、直接関係はないですが、ヤマト王権成立前史の吉備地域の影響を考えるうえで、重要な土器の一つになるでしょう。

唐古・鍵考古学  
 ミュージアム  
 【 ☎ 34・7100 】

開館時間 午前9時～午後5時(月曜は休館)  
 観覧料(カッコ内は20人以上の団体料金/15歳以下は無料)

▼大人 2000円(1500円)

▼高校生・大学生 1000円(500円)



ミュージアム上面図と展示位置